河川に携わって

Involved in river

関東建設マネジメント株式会社
さいたま支店 業務第一課 課長補佐
わたなべ けんじ
渡辺謙二
Kenji WATANABE

1. はじめに

私は昭和62年４月就職してから、橋梁架設を主に専門にしている建設会社の技術者として４年、その後建設コンサルタントに６年従事し、当時のコンサルタント社員時代も、橋梁を主とした土木構造物の設計に従事していました。

６年たった後に、（社）関東建設弘済会に出向を命じられ、平成９年より初めて河川系技術者としてのスタートとなりました。

当時は、堤外地、堤内地の意味もわからず30歳を過ぎた土木技術者として、大変恥ずかしい思いをした記憶があります。その後様々な経験を経て、平成26年４月には関東建設マネジメント（株）の社員として、河川に携わる技術者として約21年がたち現在に至っております。

2. 昔と比べて

昔といえば、私が生まれ育った埼玉県浦和市では、昭和40年代近隣を流れる芝川は、台風が来るたび洪水となり、見沼田んぼが湖のようになっておりました。今となれば、様々な治水整備により、全くと言っていいぐらいその当時のような光景を見ることはなくなりました。

現在業務として携わっている河川は、荒川本川、入間川、小畔川、越辺川、高麗川および都幾川ですが、過去には明治43年８月の台風や、昭和22年９月のカスリーン台風では、甚大な被害が発生しました。

特に、昭和57年９月の台風18号では、当時私は、浦和市内の高校に通っていましたが、同級生の何人かは、床上および床下浸水のため２日間程登校できなかったという記憶があります。

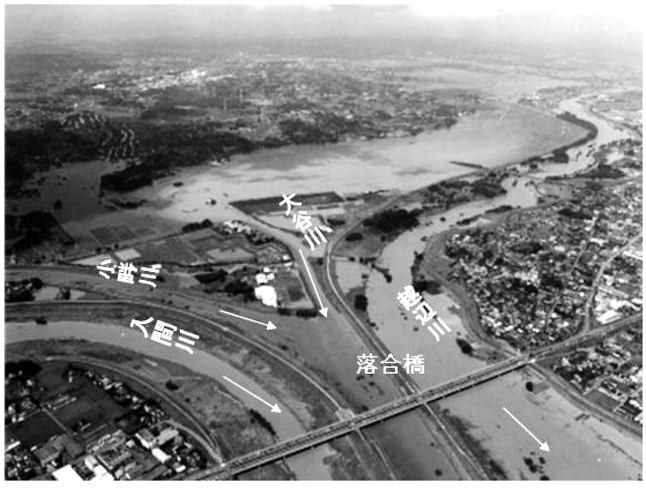
後にも記載していますが、平成11年８月の熱帯低気圧の被害は、入間市等の支川流域に浸水被害をもたらしましたが、上流ダム群と整備中であった荒川第一調節池が治水効果を発揮しました。

現在は治水整備の充実により、過去のような浸水被害が最小限に押さえられ、人の生命・財産・生活を防御するとともに、住みやすい環境になっていると思います。

3. これまでの業務経験

河川に携わる技術者としてのスタートは、発注者支援業務における積算補助業務からスタートでした。当時は国土交通省江戸川河川事務所発注工事の積算を担当し、その後、平成10年４月より平成17年３月まで荒川上流河川事務所を主に大宮国道事務所および北首都国道事務所の積算補助業務を担当しておりました。

当時は工事量も多く、特に荒川上流河川事務所積算補助業務にて、平成11年８月の大洪水〈**写真―１**〉による多数の災害復旧工事に伴う積算業務が大変忙しく、あっという間に時が過ぎているという状態でした。



〈写真―１〉『平成11年８月　熱帯低気圧』
現状の水害リスク情報や取組状況の共有－国土交通省より

平成17年４月より荒川上流河川事務所入間川出張所監督補助業務の現場技術員として、６年従事している間初めて体験したことが、質の高い河川堤防を築造するため、万能土質改良機の採用でした。当時日本に５台しかない改良機でしたが、そのうち入間川・越辺川等緊急対策事業の入間川築堤工事に４台来ておりました。

万能土質改良機〈**写真―２**〉採用により、上流部の河道掘削により発生した砂礫土および築堤前高水敷の粘性土の混合により、①トラフィカビリティの確保、②築堤土として最適な粒度および細粒分確保が実現できました。

〈写真―２〉『万能土質改良機』
（株）オクノコトーHPより

平成25年４月より管理技術者として荒川上流河川事務所管内の河川巡視業務をはじめ、工事監督支援業務、施工体制調査業務の管理技術者として現在に至っております。

4. 地域住民と河川巡視の関わり

積算補助業務に従事している時代は、特に地域住民の方々と接することはありませんでしたが、工事監督支援業務の現場技術員および河川巡視業務の管理技術者となってからは、多くの関わりを持つようになりました。

現場技術員時代は、地域住民の方々から建設機械の振動騒音に関するご意見（苦情）が多々あり、私に直接言ってこられる方もおりました。当然今までは、静かな地域であったのが、21t級のブルドーザー、0.7㎥級のバックホウおよび10tダンプトラックの多数往来があれば、私たち現場にいるものはあまり感じないことが、地域住民の方は多大なストレスを感じるのも当然のことと思いました。

この対応として、出張所監督職員をはじめとする丁寧な説明、施工者への注意喚起により、徐々に和らいできました。

また、河川巡視業務においては、実際に河川巡視員との同行巡視中で、地域住民の方と接することが多々あり、非常に厳しい意見要望をされる地域住民の方々と接することもありますが、丁寧な対応を心がけ、良好な関係を築けるよう巡視員とともに心がけております。

さらに、巡視中地域住民のシニアの方が悪天以外の日はほぼ毎日、ゴミ拾いをされている光景を目にしたときは、とても頭が下がる思いでいっぱいになりました。その時は『お疲れ様です』と声をかけ、お互い笑顔で手を振っていました。

最近ブームとなっている自転車およびウォーキングですが、堤防天端が狭い箇所では、双方の方々が、『サイクリングロードなんだから自転車優先だろう』『猛スピードの自転車にどけと言わんばかりに呼び鈴を鳴らされた』という意見があり、お互い共存しながら利用できないかなと常々思う次第であります。

5. おわりに

河川構造物に限らず、土木構造物は造るだけの時代から長く使う時代に変わってきています。長く使うには、機能維持のための目視点検による状態把握が重要であり、最終的には人の目など、人の五感だと私は思っています。

発注者に決められた事項の正確な報告で業務終了ですが、報告までに現場での工夫、試行錯誤など一過性に終わらせることなく、それを今後『見える化』を推進することで技術の承継などに活用し、これからも河川に携わる技術者として、魅力ある河川のあり方に少しでも貢献できれば幸いかと思っております。